親子キャンプ参加者の親子関係の変容に関する研究

吉村　浩菜　（生涯スポーツ学科　野外スポーツコース）
指導教員　林　綾子

キーワード：親子キャンプ，児童期，親子関係

1.　序論

今日の社会問題として，子どもの数が減少しているにもかかわらず，不登校児が増え続けていることが挙げられている．これらの問題は，小学校の時代に積み上げられた親子関係や仲間関係などについての問題が，中学生という環境変化や発達の節目を迎えて表面化したと考えられる（小石ら，1995）．このことから，児童期より親子関係をより良い関係へと構築することが重要であると考えられる．また，山脇・遠藤（2011）の研究では，組織キャンプが，児童の社会性の育成，人間関係の構築に有効であることを示している．

そこで本研究では，親子キャンプが参加親子の親子関係にどのような変容を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする．

2.　研究方法

【参加者】2014 年 8 月 13 日から 17 日に 1 泊 2 日（×4 回）で行なわれた，N 自然学校親子キャンプに参加した 12 家族 18 名（男性 8 名，女性 10 名）の保護者を対象とした．

【キャンプの概要】キャンプは，築 130 年の施設を利用して行った．プログラムには，自由選択プログラムとして，ツリークライミングや魚つかみなど 6 つが用意され，それぞれの家族が自由にプログラムを選択して行うものや，ダッチオーブンを使用した野外炊事などが行われた．また，親子で過ごすことを目的としているため家族単位での活動が中心であった．

【アンケート調査】西田（2002）が作成した母子関係尺度を参考に「危険・困難」（3 項目），「理解」（4 項目），「信頼・承認」（3 項目），「日常生活」（4 項目）の 4 因子，15 項目からなる親子関係尺度を筆者が作成し，キャンプ前（pre），キャンプ後（post1），キャンプ終了 1 か月後（post2）の計 3 回調査を行った．また，post1，post2 では記述式調査も行った．

3.　結果と考察

1）参加者の親子関係の変容

キャンプ前後における親子関係得点において，t 検定を行った結果，有意な向上がみられた．因子別では，危険・困難因子得点において有意な向上がみられた（表 1）．

表 1.参加者の得点の平均値・標準偏差・ t 値

N=18		pre	post1	t 検定
		M(SD)		t 値
	親子関係	37.78(4.10)	39.28(4.16)	2.85*
因子別	危険・困難	11.50（1.62）	13.83（1.17）	5.34***
	理解	13.44（2.64）	14.17（2.33）	1.64*n.s.*
	信頼・承認	12.83（1.47）	13.11（1.28）	1.32*n.s.*

p<.001，p<.05，*n.s.*

この結果から，キャンプ経験は，親子関係に良い影響を与えることが明らかになった．また，親子で共に困難な経験に取り組むことが効果的であることがわかった．

2）父親・母親別の親子関係の変容

キャンプ前後における父親・母親別での親子関係得点において，調査時期と性別を要因とする 2 要因の分散分析を行ったところ，主効果において有意差がみられ（時期：f(1, 16) =9.24, p<.01），多重比較を行った結果，父親の pre-post1 間において 5%水準で有意な向上がみられた（f(1, 16) =8.48, p<.05）．また，理解因子において，調査時期と性別を要因とする 2 要因の分散分析を行ったところ，主効果，交互作用共に有意な差がみられ（時期：f（1，16）=4.36，p<.05），（時期＊性別：f（1，16）=5.48，p<.05），多重比較を行った結果，主効果（時期）では，父親の pre-post1 間において 5%水準で有意な向上がみられた（f（1，16）=8.38，p<.05）．交互作用（時期＊性別）では，pre の父親・母親間において 5%水準で有意な差がみられた（f（1，16）=1.95，p<.05）（図 1）．

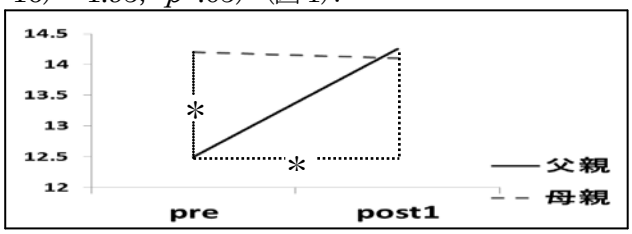

図 1.父親・母親別の理解因子得点の推移　　＊p<.05

この結果から，キャンプ経験は父親に，より効果的であることが明らかになった．その要因として，父親は，普段働きに出ていることが多いと考えられ，母親に比べ，子どもと過ごす時間が少ない．そのため，キャンプで普段の生活よりも，親子で深い関わりをもつことができたという経験が，子どもへの理解へと繋がったと考えられる．

4.　まとめ

本研究の結果から，キャンプという場で普段の生活とは異なった体験を，親子で一緒に経験することは，親子関係にポジティブな影響を与えることが明らかになった．特に，父親において効果的であることがわかった．

本研究では，対象となる子ども，1 ヶ月後データを回収できた人数が少なく，統計にかけることができなかった．しかし，今後さらなる理解のために，子ども側から見た親子関係や日常に戻ってからの親子関係の変容を検討する必要がある．また，キャンプの期間や，プログラムの内容と親子関係の関連についても検討する必要がある．

引用・参考文献

小石寛文（1995）：人間関係の発達心理学（3）.児童期の人間関係,培風館：東京

西田裕紀子（2002）：青年前期の母子関係に関する研究－母親・子どものペアデータの分析－.心理発達学論集,32：27-35.

山脇あゆみ・遠藤浩（2011）組織キャンプにおける参加児童の社会的行動に関する研究.第 14 巻,2 号（通巻第 27 巻）：1-27.